

安心して生活できるか？；福島の仮設住宅の実状

田崎和江¹⁾ 白藤せいこ²⁾

¹⁾ 金沢大学名誉教授・NPO河北潟湖沼研究所主席研究員

²⁾ 山口大学経済学部東アジア研究室

2011年3月11日に東北地方太平洋沖地震（M9.0）が発生した。この地震により、東京電力福島第一原子力発電所から広範囲に放射性物質が飛散した。事故から3年半たった今日、これまで高濃度に放射能汚染された地域の小規模な除染作業が行われてきたにすぎない。広大な森林については的確な除染法がまったくとられていない。筆者らは、2011年から3年半、放射能汚染地における除染方法を探るため、福島県南相馬市周辺の調査・研究・実証実験を行ってきた。

一方、福島での調査の傍ら、南相馬市鹿島区小池長沼仮設住宅の訪問を平行して行ってきた。金沢からお米・野菜・菓子などを届け、手工芸・陶器の染付け・七夕飾り教室の開催、現地での焼き芋配布、料理講習会、各自の写真撮影会などを行ってきた。また、金沢への招待と交流会の開催なども行っている。この間の小池長沼仮設住宅の住民との交流や文通でその生活が見えてきたのでその一端を報告する。

仮設住宅の老人達；孤独「死」、関連「死」、入院

2014年6月にその仮設住宅を訪問した時、3人目の孤独死が見つかった。なんと死後4日もたっていた。狭い長屋なので音も筒抜けだが、その家のテレビがついていたために発見が遅れたとのこと。その仮設住宅のリーダーは心労で入院しており、病院に見舞いに立ち寄った。入院中もあちらこちらと電話でやりとりし、多忙を極め、顔色もすぐれなかったが1ヵ月後には退院し、「今、退院しました」の電話がきた。

仮設住宅の老人（ほぼ全員が75歳以上で一人暮らし）からは近況を知らせる手紙がたびたび来て、短歌なども詠まれていた。さびしくて泣きたい時には私の母（90歳で他界）の笑顔の写真を見ろという（自費出版の本100p）。仮設住宅の住民同士が交流を持って助け合っているの、毎日が楽しいとも書いてくる。毎日の生活における気持ちのゆれ、喜怒哀楽がよくわかる手紙である。一方、新聞紙上でも、今年になって、この問題がとりあげられるようになった。

2014.02.20. 震災関連死、が直接死を上回る（福島1656人、ストレス影響）

2014.03.08. 東北の精神疾患増（3県医師4割回答）

2014.03.13. 震災関連の自殺37人（福島は毎年増加）

2014.05.27. 浪江町和解受け入れへ（慰謝料月5万円増）

2014.08.27. 追いこまれる避難者（震災関連自殺者、福島では増加傾向）

2014.09.08. 被災地自殺相談15万件（全体の28%、全国の2.5倍）。

世界から見た“フクシマ”

2013年7－8月、筆者がカナダを訪問した時、バンクーバー半島のウクレレ海岸に漂着した日本の津波瓦礫の調査に加わった。カナダ・アメリカの太平洋沿岸には日本から膨大な量の津波瓦礫が漂着しており、『環境・緊急サービス機構』研究グループが2011年以降、空と海から調査を行っている。筆者は2年間漂流してウクレレ海岸に漂着した浮きのロープとイガイの殻の表面を電子顕微鏡で観察・分析し、放射性核種を検出した。

また、カナダ原子力機構（マニトバ州ウィニペグ）の研究者との除染法の話し合い、モントリオールの大学での原発に関する授業のほか、トロントではカナダ在住の女性がつくる「華やきグループ」の勉強会にもよばれて、福島の実情について講演した。カナダには2013年1月現在18基の原子炉が運転されており、その関係者も参加していた。

2014年9月初旬、イタリア・ペルージャで「世界湖沼会議」が開催されて、“福島原発事故後の環境”について研究発表を行った。その後、イタリア在住の翻訳者と知り合い、「フクシマは世界を変えたか；ヨーロッパ脱原発事情」（片野優著、2012年4月30日発行、河出書房新社）と「世界で広がる脱原発；フクシマは世界にどう影響を与えたのか」（別冊宝島編集部、2011年11月24日発行、宝島社）の2冊をいただいた。何と、この2冊は現在、販売禁止（絶版）になっているとのことである。イタリアで行われた脱原発の国民投票について生々しく書かれている。

放射性物質除染法；安心・安全・安価・簡便・持続可能・地元の物を使う！！

水田や農業用水の除染方法を探るため、福島第一原発の北西25kmに位置する南相馬市原町区馬場において“安心・安全・安価・簡便・持続可能・地元の物を使う”ことをモットーにした実証実験を行ってきた。その中で、過酸化水素＋モミガラ法、珪藻土や粘土で被覆する除染法については特許申請し、すでに実用化している（田崎2012；Tazaki 2013；田崎ほか2013a；田崎ほか2013b；田崎ほか2014；Tazaki et al, 2014）。プラスチック製品を用いた農業用水の除染結果も報告している（鈴木ほか、2014）。

放射性核種は大気中のチリに付着して拡散し、風雨により森林樹木や表層土壌の10-20cmに沈着・堆積している。しかし、放射能は放射線量計で測定し、ゲルマニウム半導体検出器で放射性ヨウ素、放射性セシウム、放射性カリウムの定量分析ができるだけで、肉眼で見ることもできず、色も形も臭いもなく実態がつかみにくい。しかし、蛍光X線分析とエネルギー分散型分析電子顕微鏡を併用することで汚染物質を観察できる。付着物質の形態、放射性元素の存在と濃度分布を目で見ることが可能である。

現場で放射線量を測定し、実験室では鉛の箱の中で線量を再測定し、確かな試料を分析・観察することで、論文や著書を公表してきたが、国内の学術誌からは軒並み却下または握りつぶしにあった。研究者生命を絶つものは何か？を考えさせられた3年半でもあった。下記の言葉は海外の研究者仲間が私に送ってくれたエールである。

No one can change the past, everyone can change the future.